

トーマス・クーン著『科学革命の構造』中山茂訳（みすず書房、1971）

作成：多久和研 M1 菱木

p.39 第4章 パズル解きとしての通常科学

▶ 通常科学の研究問題

- 著しい特徴：斬新なものを生み出す作用はしない
 - ・波長の測定：結果の範囲は想像力より狭い
 - 結果がこの範囲に入らなければ、科学者側に謝りがあるとされる
 - ・電気引力の測定：18 世紀クーロンのパラダイムでは「単なる」事実
 - その後できたパラダイムでは「電気現象の性格」表す
 - パラダイムの整備を目標としていても斬新さを目指しているのではない

p.40

▶ なぜ科学者はこうした問題に取り組むのか？

- 今までのやり方の繰り返しを拒否することに魅力がある
- …・ 予期している結果が出る方法が疑問であること：「パズル解き」
 - ・ 解答が存在するという事はパズルの規準

p.41

- パズルとの関係

(i)パラダイムから得るのは問題を選ぶ規準

- ・パラダイムが受け入れられればその問題に解がある

p.42

- …・ 専門家の集団を社会的な問題から隔離する

理由) 社会的な問題はパズルの形に直せないから

←教訓：ベーコン主義、社会科学

- ・科学者の動機：実用化、新分野開拓、秩序を示す、定説を覆す

研究に取り組むと：腕さえあれば今まで誰も解けなかったパズルを解ける

p.43

(ii)ルールがある

- ・全ての絵片を使い、隙間なく埋める：「既成の立場」「既成概念」

例) ・ 光の波長の測定：理論と合うものであることを示さないといけない

